

# 淨土

1988-11

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 每月一回 一日発行  
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別授承認雜誌） 第三三五号  
昭和六十二年十月二十五日印刷 昭和六十三年十一月一日発行  
第五十四卷 十一月号





# 十一月の秀句

口に袖あてゝ行く人冬めける

高浜 虚子

霜月や坊へまゐらす回向米

高田 蝶衣

団栗と共に掃かるゝ落葉かな

正岡 子規

話

## お十夜法要に因んで(下)

法

金かね子こ寛かん哉さい

(大正大学講師)



### 四、観誉祐崇上人くわんよゆうしやうにん

お十夜法要の典拠よとりしころとそれにもとづく法要が行なわれるようになった所以については前号に於て述べた通りである。

この法要が鎌倉光明寺で行なわれるようになったのは、平貞国が真如堂において十日十夜の念仏を行なつてからおそよ六十年後、後ご土御門天皇つちのみかどの明応四年(一四九六)に、光明寺の第八代観誉祐崇上人が勅命によつて御所に

招かれ、浄土の教えを帝に御進講されたのに始まると言われる。

さて、この帝に浄土の教えを御進講された祐崇上人とはどのような方であつたのだろうか。師の伝歴を尋ねて見るとおおよそ次のようになる。

師は千葉県(上総)の出身で、十三歳の時に鎌倉光明寺第七代慶順のもとに弟子入りされている。出家後、浄土宗の教えは勿論のこと、天台や真言の教えまで幅広く学ばれた。享徳

# 十一月号



是の音を聞く者は、みな自然に、  
念仏、念法、念僧の心を生ず。

——『阿弥陀経』

## 目次

### 法話

お十夜法要に因んで(下)……………金子寛哉……(2)

### ずいそう (2)

越前平泉寺にて

——一つの道をつらぬく——……………戸川 霊 俊……(9)

### =にこにこ法話⑥=

どうしてお花をこっちにむけているの……長谷川 岱 潤……(24)

### 《特別寄稿》

須弥山の世界(二)

……………後 藤 真 康……(16)  
——存続上人「世界大相図」を読む——

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <20>

海と山の狭間で

……………木 下 隆 一 ……(30)  
——我が思い出に住む犬たち(6)——

### ◇◇ 特別連載② ◇◇

法然上人と中里介山(中)……………須 藤 隆 仙……(37)

表紙絵 小林治郎画

三年（一四五四）には学成つて故郷へ帰り、木更津に選択寺を創立し、また寛正三年（一四六二）には東京品川に願行寺を開創された。次いで駿河（静岡）袖之木に龍泉寺（現、宝台院）を、更に同国江尻に江淨寺を建立している。

文明十四年（一四八二）十二月には聖書（じやうしょ）をうけ、慶順の後を継いで光明寺第八代（住職順では第九代、今は法脈順）となった。

丁度その頃、後土御門天皇より「天下太平祈願」の下命を受けた為、師は御祈願堂を建て、源信僧都手刻の阿弥陀仏像を安置して祈願の行を怠ることがなかった。この後延徳三年（一四九一）九月には天皇から「祈禱」の二字の御書を賜わり、このお堂に掲げた。このようなことがあった後、ついに明応四年（一四九五）三月（一説に九月）勅召を蒙り、宮中へ参内して浄土の教えを説かれたのである。この時には宸翰の『阿弥陀經』を下賜されて

いる。

次いでこの時知恩院で三七日間開講した所、經紳の聴聞する者が非常に多かったと言われている。同年四月には帝からの勅命によって光明寺を「勅願道場」とし、また「関東総本山」の号を賜わり、更に五目には常紫衣地の寺としての綸旨（りんし）を下賜されている。

このように厚い帝の帰依をうけられ、この年の十月には前回述べた真如堂の大衆を率いて宮中の紫宸殿において十夜法要を勤修することとなったのである。その席には帝を始め、后妃、臣僚等も列席し、深く感銘されたことは言うまでもない。師はこの時帝に対し、弥陀本願の主旨に基づく十日十夜の法要は浄土宗の教えの中心であり、出来ることなら真如堂に伝承されるこの十夜法要を鎌倉光明寺でも行なわせていただきたいと言う願いを申し述べた。帝はこの祐崇上人の篤志を大変喜

ばれ、その願いの通り、勅命によつて光明寺で十夜法要を行なうことを許可されたのである。

師はこの後永正六年（一五〇九）弟子の正空に寺職を譲り、念仏三昧の生活を送られたが、同年十一月八日ついに入寂された。師には著作も多くあり、開創された寺院も上記の外に駿河の小川教念寺、同元市場法源寺、武蔵赤岩の源光寺、相模三浦の法幢寺、同正行院、京都寺町永養寺、伏見の城円寺等およそ三十余カ寺に及ぶと言われている。

これら開創寺院の位置から見ると、関東中心とは言え、静岡、滋賀、京都と広範な地域にわたっていることがわかる。このように広範な地域にわたって活躍された人だけに門下にも優れた人材が多数集まったものと考えられる。

師の入寂後の事と思われるが、古老の伝え

る所によると、師は地藏菩薩の応化身であると言われている。これは師が生前に一巖窟を開き、地藏菩薩の石像を安置して礼殿を建ててお参りされ、しばしば拝瑞を感じ、また他の参拝者も病気がなおったと言うような種々の靈驗談によるものと思われる。帝への御進講と共に、地藏菩薩の応化身伝説が付加されたのは師の人並はずれた教化活動に対する畏敬の念から出ているものと思われる。

## 五、後土御門天皇の浄土教信仰

以上のように祐崇上人を招いて浄土の教えを聴聞し、勅命を下して光明寺への十夜法要を許可された後土御門天皇とはどのような御方であったのだろうか。今少しく帝の信仰の様子を尋ねて見ることにしよう。

後土御門天皇は第一〇三代の帝で、名は成仁<sup>なり</sup>と言ひ、後花園天皇の第一皇子であった。

一四六六年に皇位を継承され、在位三十五年で一五〇〇年に没している。帝の即位後間もなく応仁の大乱がおこり、それ以来室町幕府の威令もあまり震わなくなった。いわば群雄割拠の戦国時代の始まりの時期であった。

帝は即位後間もない文明二年（一四七〇）の冬の初めにはもう御譲位の意向があると言う噂が立った。翌三年四月にはいよいよ落髪されようとした為、將軍義政は伏見貞常親王を通じて之を止められた。しかし、一度思った以上途中で止めるべきではないと言われ、遁世の用意にと、法然上人以下の浄土の法文数部を書写されたと言う。また帝の御製に、

(1) 一筋にたのむこころの道しあらば

ふたつの川は浪かくるとも（京都曼殊院に宸筆蔵）

(2) わがよはひ弥陀のちかひのその数に

あへるをときとうつす面影（延徳元年

（二四八九）の作）

(8) 誓ありとおもひうる身になす罪の

おもきもいかで弥陀はもらさむ（明応八年（二四九九）作）

と言う歌がある。先の遁世の用意と言い、これら三首の歌と言い、帝が浄土の厚い信仰を持っていたことを示すものと言えよう。中でも(2)の歌を読まれたのは帝が御自身の年齢と弥陀の四十八願の数とを重ね合せて詠まれたもので、その浄土信仰の深さの一方ならぬものであったことを示している。しかもこの歌を詠まれた延徳元年から二年後の同三年九月に、帝はかねてから「天下太平祈願」を下命していた光明寺の祐崇上人に対して「祈祷」の二字を書して下賜されている。このことは祐崇上人の所で既に記した通りである。

このようなことから考えると帝の浄土教信仰の中でも祐崇上人と接触された頃が最も熱

心にそれを求められた時期であったのではないかと思われる。今念の爲帝の浄土教信仰の足跡をたどって見るとおよそ次のようになる。

文明十二年（一四八〇）三月五日後花園院の旧藏であった「法然上人画像」を御覧になり、同年五月二十七日には青蓮院尊応より「法然上人足引画像」をお見せいただいている。また、文明三年から八年にかけては毎年正月、五月、九月の十三日に禁中において恒例の百万遍念仏が行なわれ、三条西実隆、甘露寺親長等を始め、内々の人及び女官等がその中の五万遍、六万遍等を勤めたことが知られている。これらの点から考えると、当時浄土教信仰が宮中深く浸透していた様子がうかがわれるのである。

帝が帰依された僧としては二尊院善空（慧篤、文明三〇八年頃）、仏陀寺邦諫（晁堂、文明八〇十六年頃）、西教寺真盛（文明十七〇明応四年

頃）、そして祐崇上人等であるが、これらの人々から浄土三部経や善導の著作、そして『往生要集』等の講釈をそれぞれ聴聞されているのである。これらの中でも明応四年伊賀の西蓮寺で真盛が入寂されたその日、帝は東の空に紫雲の棚引くのを観たと伝えられておりその帰依の程がしのばれるのである。

帝が浄土教を聴聞されたこれ等前三人の僧の経歴を見ると全て京都近郊に在住する僧である。このようにして浄土の信仰を深められた帝が年齢的にも円熟して来た時期に、関東の、しかも浄土宗の本流とも言うべき光明寺の祐崇上人を招かれたのは、今のべた三人の僧との交流があった後のことになる。前にも述べたように祐崇上人の活躍がずば抜けており、その名声も高かったことは言うまでもない。しかし、少しうがって考えると帝が祐崇上人を召されたのには別な面からの配慮があ

ったのではないかと考えられる。それは帝から祐崇上人への最初の働きかけが「天下泰平祈願」であつたからである。これは言うまでもなく帝の即位後間もなく応仁の乱が起り、以来政情不安の中に生涯を送つてこられたことの表われであらう。その祈願の勅命を下したのが京畿の地でなく、関東のしかもかつての鎌倉幕府の中心地にある光明寺であつたことにはそれなりの含みがあつたように思われてならない。その上光明寺が関東地方の浄土宗教団の中心であつたことを考え合わせると、後に下賜される「勅願道場関東総本山」の寺号額の意味する所も、その背後に何等かの配慮が加えられていたように思われてならないのである。

それは兎も角、後土御門天皇に招かれ、祐崇上人が『阿弥陀経』を講じ、十夜法要を光明寺で修することが出来るようになったこと

は当時の光明寺や関東の浄土宗教団にとつてかけがえのない力となつたことは言うまでもない。祐崇上人が帝に進講された時に帝から下賜された『阿弥陀経』版本の奥書には「仏陀寺安置之」と記されている。これは恐らく帝がかつて仏陀寺邦諫の講を受けた時に用いられたものと思われる。尚その後「明応四年三月上洛し、この阿弥陀経を知恩院に給はつて講談致すべしとの命あり、観音は香衣を著て参内し、三七日の間談義申し上げた」と記されている。

これらのことから考えると、光明寺で十夜法要が行なわれるようになったのは、たまたま帝と祐崇上人との偶然の出会いによってなされたのではなくて、以上述べて来たような深い縁と、時代背景をうけてはじめて営まれるようになったことを、改めて振り返って見ることも、お十夜法要の意義を考える上で必

要なことではないかと思われる。

## 六、むすびにかえて

光明寺でお十夜法要が営まれるようになった所以は以上に見た通りである。それ以来、光明寺のみならず、浄土宗所屬の各寺院に於て広くこの法要がつとめられるようになった。

しかし、光明寺に伝えられた「引声阿弥陀經」「引声念仏」の十夜法要も、伝承以来二百程経過すると多少衰頽の兆しが見られるようになった。

中御門天皇の享保十一年（一七二六）に常陸（茨城県）の瓜連にある常福寺の義譽観徹上人が光明寺の五十七代を継がれ十夜法要の復興に尽されている。師は光明寺へ入山される直前の享保十年に二人の弟子を京都に遣わして「引声弥陀經」を研究させ、それを光明寺に持ち帰らせているのである。今日鎌倉光明寺

に伝承される古式の十夜法要が存続しているのはこのような歴代の祖師の努力の賜物である。

このような努力の積み重ねによって伝承された十夜法要は人々の心の奥深くに浸透している。十夜法要を詠んだ句の中にその様子がしのばれる。

菜畑を通して呉れる十夜かな

アラ笑止十夜に落つる庵の根太

下駄の上渡りて上る十夜寺

菜畑や横すじかいの十夜道（一茶）

合点首ばかりして居て十夜婆（静雲）

阿波に多き狸の咄十夜粥（桜桃子）

等々、人々の心に残る十夜法要のぬくもりが感じられる。今後また末永く十夜の新風俗が記し止められて行くことを念じつつ。

（了）

## 越前平泉寺にて

— 一つの道をつらぬく —



戸川 霊俊  
と お れい しゅん

(京都・左京区西住院住職)

さる晩秋の一日、奥越前勝山の地に平泉寺を訪れる。

わたくしにとっては、八・九年前から二度目である。老杉森々と生い茂る杜の中に、僧坊三千の跡を偲ばせる苔むした礎石の累々たるが空しい。

観光社寺のような、群れなして訪れる人の姿は見られない。わたくしと寥々たるのみである。

南朝勤皇の歴史を偲びながら社前を辞して、参道を元にもどり古寂びた宮司館に立寄る。玄関に出てこられたのは品のよい中年のご婦人であった。

玄関の式台に立つと、以前に初めて参拝した日のことが追想されてくる。その時は、教え子の結婚披露に招かれて、福井を訪れたとき、着いた時間に余裕があったので、時間を

計って観光タクシーに適当にガイドしてもらうことにした。

わたしが選んだのは、永平寺よりも宝慶寺か、この平泉寺の地であった。

わずかな時間を、水の情洩れな大野の城下町から平泉寺へと急いだのである。

泰澄大師開創の平泉寺。神仏習合であるけれども、今ははっきりと加賀白山の霊峰を神体と仰ぐ白山信仰の神社である。その石標が参道入口の大鳥居の前にいかめしい。

宮司館の玄関さきの枝折戸を明けると足利時代の管領細川頼之の作庭と伝える四百年の緑苔の絨緞が杉木立の下に眠にしてみる。

「料金など貰わないで観てもらうのが本意なのだが……」気稟のある白髭の美しい白衣の老翁の優しい心づかいである。

庭を案内してくれる高校生らしいとみた少女に私は、「あの方は、あなたのおぢい様ではないの？」と質ねた。「はい、私の祖父です」の答が返ってくる。

矢張りそうだった。宮司館の門を入る時、ちらっと見た表札ははっきり「平泉澄」であった。

平泉澄。

自分の心の中で繰返へし呼ぶ平泉澄先生は、越前平泉寺のお生れとは、嘗て聞き及んだことであるが、いま目前にするこの老翁こそ、その人の今のお姿かと、辞去するときに改めて見つめたのである。

わたくしにとっては、本当は、今が先生との初対面なのではない。幾十星霜さかのぼる

若冠わたくしの学窓の日、東大から国史学の平泉澄博士が来講されたとき、史学専攻でない自分であるが、そのころ関心を抱いていた「山崎闇斎と崎門学派の思想」に就ての先生の講義を聴講したからであった。その折の闇斎学派の尊皇斥覇についての先生の烈々たる皇国史観の窺える講義内容は、時代がまさに転回しかけようとするせいもあるが、当時の若い私たちの胸に少なからぬ衝動となった。

地方の旧制高等学校の歴史の教師たち平泉門下の若い史学者らが中心となって、若人の為に開いた加賀一の宮白山吡咩神社での禊と日本精神講座と銘打った集いは、まさに、マルキシズムの社会科学研究会の学生運動に終止符を打とうとする一ムーヴメントであったと思う。これも平泉史学の影響であったであらうか。

宗教学から民俗学へ興味をもったその頃のわたくしにとって、先生のアジールの研究も、また一つの指標でもあったと否められない。

研究室への出入にも、学生の挙措進退に厳しくあられたという。日本刀の刀架を背に端然と静座さたる姿、恐らく南朝悲史に忠節をつくした平泉寺の僧徒の形成した環境が、斯の人の人格を醸成する契機であったろうか。

「神社に残る数多の古文書類は、息子が学位論文の資料とするまで、誰れ人にも触れさせない」と頑くなまでに他の求めを拒まれたということも、いま、伝説のように想い浮かべられる。

平泉澄先生は、太平洋戦争の敗戦とともに、「自己の学説世に合わず」と信じられたの

であろう決然と東京帝国大学を辞し、故山ここ平泉寺の地に帰られたと。

わたくしの目の前にあられるこの老宮司こそ、皇国史観に生き貫らぬかれた。かの平泉史学の今の真姿なのである。そう思うと思想や主義の立場を超えて、その時世に超然とした潔き態度に、感銘つきぬものを覚えさせられるのである。人間の生き方の真実を教えられたのである。

時代は、科学的史観である。それも可い。戦前の時代の権力に迎合した思想を、戦後は鮮やかに否定し去る豹変の学人。節操の変化を思想の発展とも解すべきであろうか。

無知の自覚を説いたソクラテスが、いまこの世にあるなら、どのように解釈するであろうか。デルフォイの神託に、真に知るということは、自己の無知を自覚すること、真の智者とは、自らの無知を自覚する者すなわちソクラテス自身であるとする哲学の起源の故事は有名であるが、それにも比して真の学者とは、平泉澄先生の学問への態度について言えることであろう。

あれから、時経ていま再び平泉寺の宮司館を訪れたわたくしは、案内してくださる婦人に今は亡き平泉澄先生との出会いの日の姿を重ね写して偲ぶのである。

この社には呪術めいた祭りはない。迷信めいた呪符・護符の類は商われていない。古色蒼然として四百年の歴史をもつ社殿を中心とする神域の環境はまさに神韻縹渺である。

その中に、老宮司の姿をみられないのが寂しい。平泉澄先生は、両三年前九十一の齢で亡くなられた。

これから冬に入ると、奥越前は深く深く雪が積むことであろう。その深い雪が融けて、広い神域の杉苔が緑あざやがに耀き、或いは、庭園の沙羅の花の開くころ、また訪れたいものと思ひながら山を下りた。

宮司館の門には、平泉澄の表札はもう見えない。新しく掲げられたのは、世襲された新しい宮司であるご子息のものであらう。

人間の数のあるだけ人間の歴史を観る立場はさまざまである。どれが絶対ということはないであらう。どれにも存在理由が求められると思う。それだから、歴史観互いの対立も批判もあってよろしいと思う。

皇国史観でも、唯物史観でも。殊に宗教はそれぞれのもつ歴史観が、その基礎となるのであるから、仏教の末法史観も、アウグスチヌスのような中世キリスト教的二元論史観も認められるのである。近代の進歩史観も展開史観もそれぞれ根拠が存在するはずである。

「歴史の軽んぜらるること、今日のごとくはなはだしきはあるまい。もちろん歴史に関する著書論文の発刊せられるものは多い。しかし多くは過去に対するに侮蔑もしくは反感をもっている。……戦後社会の動揺、人心の不安、今に至っておさまらぬは、けだし過去との連鎖を絶ち、父祖の歴史を忘却した所に、その根本の原因があるのであらう」(平泉澄著「山彦」歴史の忘却より)

これは晩年、北陸の新聞に寄せられた先生のご感懐の一節である。

こんどの平泉寺行に一緒してくれたのは、今日兎角の批判を受けている皇国史観なるものに、自己の異った立場からいたく関心を寄せている、武生に住むひとりの旧友であった。数日後に控えている北陸路のお十夜の準備のせわしさを繰りあわせてであった。

朝倉遺跡も、九頭竜ダムも観たい。それよりも、この南朝にゆかり深い平泉寺について、わにくしの行きたかったのは「宝慶記」の宝慶寺である。曹洞宗永平寺に次ぐ第二の名刹である。「日本曹洞第二道場」である。

越前も大野市から一二キロ離れた清瀧川の上流、標高五〇〇メートルの谷ふところにあるこの寺は、人家を隔絶し生活きびしく、代々一宗の高僧が住持されるのであるが、常在が稀れであつたらしい。

永平の道元禅師を慕つて来り、弟子となつた宋の禅僧寂円の開くところ、麓の村も一戸残らず、大野や福井やそのほかの地に移住し、過疎というよりも廃村である。麓には宝慶寺小学校社の標の立つ草生うる空地がある位である。

麓から登る山門への山道はけわしい。ところどころの老樹の根に休みながら、つまづきながら登る。

流石に、薦福山宝慶禅寺は、見世物の寺でない。ご祈祷の寺でない。曹洞禅第一の修行

の寺だ。そのごしい参道をのぼることに最初の修行が求められている思いがする。この山を上り下りして世間に出てゆく托鉢行も、修行僧にとっては何んでもないと言えばそれまでであるが、これからの奥越前の冬の永平の三倍も降るといふ深い積雪の中の行は大変であろう。人の訪れもない秋から春への僧院の修道生活——そこにこそ真実の自己究参の日々があるのであらう。

わたくしが拝登した日は、新しい住持を迎えて、一宗が力をこぞつての修行道場の建築が営まれている最中であつた。新しく住持される老師は、開山の系統をひく寂円派の近江正伝寺出自であるという。永平寺がいささか観光寺院化しつつある趣きにあるときに、ここ修行の寺宝慶寺の道場にこそ、老師の提撕にこそ真の嗣法者の生れることを期待したい。老師を慕い來つた者たちであらう若い雲衲達が、広い堂の内外のそこを衣体をかち上げて、元気に動きまわっていた。

「焼香・礼拝・念仏・修懺・看經を用いず、只管打坐あるのみ」——「宝慶記」

わたくしは浄土門のわれわれにも「こんな道場が」と呟いたが、わが友は「自分の方は信だから」とも答えず、ただ頷いてくれるのみであつた。

平泉寺から宝慶寺への今日の行程の終りに——『歴史研究者の研究』というべきものを、もうそろそろ研究すべき必要の時が来ているのではないか——と洩らした彼の言葉が印象的であつた。

特別寄稿

須弥山の世界（二）

― 存統上人「世界大相図」を読む ―

後藤真康

（東京・江東区円通寺住職、農博）

阿耨達池、八大地獄、金輪

閻浮樹とともに閻浮提を特徴付けているのが『阿耨達池（無熱惱池）』である。この池はインド北部にあるといわれ、常に清澄な水がわきだしている。池の東に銀の牛、南に金の象、西に瑠璃の馬、北に瑠璃の獅子の頭がある。それぞれの口から水が流れ出し、池を一巡して流れ、恒伽河（ガンジス河）、信度河（インダス河）等の大河となるという。

渦巻き状の流れで無熱惱池を現した絵図も多い。江戸時代の百科全書である寺島良安の「和漢三才図会」（一七二二）には地誌の部に「五天竺図」を載せている。これは鳳潭上人

の「万国掌菓図」(二七一〇)を元にしたものといわれ、渦巻き状の「阿耨池」があるが閻浮樹はない。存統上人の閻浮提図付日宮図では閻浮提の中心に当時最新の世界地図を嵌め込んだため、無熱惱池はただの小さな池になってしまった。のちに書かれた天竺輿地図では再び仏典の記載どおりに渦巻き状の無熱惱池を書き、ちゃんと四獣の頭まで書きこんでいる。

閻浮提の下三百由旬に『瑛魔王国』がある。他人の苦しみを喜ぶ者がこの国の卒となり、その他、多種類の鬼がいて書いてある。俱舍論によれば閻魔王は餓鬼の王であるから、瑛魔王国は餓鬼道に相当する筈だが大相図には明記されていない。瑛魔王国の下に『八大地獄』がある。『等活、黒繩、衆合、号叫、大叫喚、炎熱、極熱、無間』の八つである。さらにその四面に各々『四増地獄』があるのだそうである。全く人間とは罪深いものだと思ってしまう。

須弥山世界の最下部(最外層)では第八海の外測をぐるりと円形の『金輪こんりん』が取り巻いている。金輪の下は同じ直径で厚さが約二倍の『水輪』である。つまり、金輪は水輪の上部が変化したものであり、『有情の業力が水輪の上を撃って変化させたのだ』と書いてある。金輪の上はお盆の縁のようにもありあがった『鉄圜山てつゐんざん』となっている。このように金輪は生物が越えることのできない境界であるから、「もう金輪際こんりんざいにがさない」などという言葉が生まれたのである。

水輪の周囲は広さ無数の『風輪』で囲まれている。風輪といっても堅いことは金剛(ダ

イヤモンド)以上だそうである。この風輪から次ぎに書く六欲天までを一つの『須弥世界』というのである。なお、お寺の本堂や仏壇で仏像を安置する台を「須弥壇」というが、これは須弥山をかたどったものである。須弥山や閻浮提は仏画や仏具の模様などにも使われてきた。デフォルメされていて解りにくいものもあるが、七層の山や塔で囲まれた頭でっかちの宮殿や塔、四大洲の形、渦巻き状の無熱惱池、閻浮樹などが目印となる。

## 夜摩天、梵天、有頂天、三界

大相図の下半分には『大相図序』という文章があり、その内容は先に紹介した。ここに『須弥山世界中には欲界、色界、無色界の三界と二十五有の区別がある。』と書いてあり、大相図の上の方、右半分にその説明がある。『欲界』とは欲望のある有情(生物)の住む世界である。欲界の生命は「天上、人間、『傍生』(畜生)、修羅、餓鬼、地獄」の「六道」を輪廻していることはよく知られている。ただし、俱舍論では修羅をばいいて「五趣」としている。欲界に属する天上界(天)は六つあり、下の二天は妙高山にある三十三天と四王天で、これを『地居天』という。上の四つは空にある『空居天』である。空居天の一番下側、妙高山のすぐ上にあるのが『耶魔天』(夜摩天)である。夜魔天はインド神話のヤマに由来する。ヤマは神から生まれた最初の人間で従って最初の死者であり、死者の国の王になったのだそうである。古代インドでは死者の国は天上にあるとされたから、これが仏教に取り込まれて地上のすぐ上の天人とされたのであろう。夜摩天の次が『都率天』

(兜率天)である。都率天には「弥勒菩薩が居る」と書いてある。弥勒菩薩は末法の世の衆生を救うため五十六億七千万年後にこの世に現れるまで、都率天で修業されているのである。都率天の上に『化乐天』があり、その上の最上段は『自在天』(他化自在天)である。大乘仏教の經典の華嚴經は、釈尊が菩提樹の下に座しながら同時に忉利天、兜率天、他化自在天に現れて法を説くという構成をとっている。

これら欲界の天上に住む有情はそれぞれ数千、数万年の寿命があるが結局寿命が尽きることは免れず、新しい有情を生まなければならない。この説明文には『六天成』、娼、差別如、次、交ト抱ト執手ト笑ト視』と書いてある。娼とは女偏に播の旁をつけた面白い字であるが、要するに男女が情をかわす方法である。天上界も上へ行くほど欲望は淡泊になるのであるが、笑や視だけでは少々ものたらない気もする。

欲界の上は欲望のない生命の住む『色界』である。「色」とは色気ではなく「形あるもの」のことである。「色即是空」の色も同じ意味である。ここには十七の天があり、四つの『禪』に区別されている。禪は「禪定」の禪で、禪の道を極めて欲望を解脱した有情の住む世界だから禪というのである。最初の三天は下から『梵衆天、梵輔天、大梵天』でこれを『初禪』という。初禪界の王が「梵天」である。梵天様はインド神話では真理(ブラーマン)を神格化したものであるが、仏教にとりいれられて帝釈天とならぶ仏法の守護神となった。初禪は須弥世界のすぐ上にあるので、須弥世界と一緒に『成、住、壊、空』の四つの歴史を繰り返す。後述するように、成劫の最初に生まれるのが梵天王である。

初禪の上の二禪、三禪にはそれぞれ三つの天がある。これらは初禪以下が破壊される余震をうけてときどき壊れ成ずることを繰り返す。三禪の上の四禪にある八天にいたってやっと破壊からまぬかれる。四禪に一天を加えて九天とする説もある。四禪のうち上方の五天を『五那含天』という。四禪の最上すなわち色界の最上階が『色究竟天』である。

大相図ではここまでの天は階段状に図示されているが、その上にはただ文章でこの上に『無色界』の四天があることを説明している。無色界は形のない世界であるから図には書けないのである。以上、欲界、色界、無色界を合わせて『三界』というのである。「三界万靈」の三界である。「女は三界に家なし」などという三界もここにもきている。このように、通常は単に宇宙全体という意味で用いられることが多い。

これら全部で二十七の「天」にはそれぞれ名前があり、そこに住む有情の体の大きさや寿命も一々記載されている。これらは人間が仏へと解脱してゆく過程を現していると見ることもできる。すこし繁雑すぎるようだが、このように万事を細かく分類するのがインド哲学の癖だという。しかし、たとえば「すべての人は皆、極楽に往生できるのだよ」と、いきなり言われるよりも、観無量寿経のように「上品下生」から「下品下生」へと色々な住生を順次説明された上で、「九品皆凡でみんなおなじだよ」と言われた方が納得しやすいであろう。

無色界の最上階は『非想非非想天』である。大相図には書かれていないが、非想非非想天は世界の頂上であるから「有頂天」という。ただしこれは俱舍論の説で、法華経では色

界の最高の『色究竟天』を有頂天としている。得意の絶頂にあるのを「有頂天になる」というのはここからきている。さしずめ、恋人のハートを射止めたり競馬で大穴をあてるのは色究竟天で、優れた芸術を完成させたり、学術上の大発見をするのは非悪非非想天であろうか。なお、有頂天からおこちるのが「究天直下」でこれが「急転直下」になったともいわれる。似たような言葉の「九天」は、中国の天文用語で天を九つに区分していることから来た言葉で仏教語ではない。このように「・天」とい言葉は中国の天文用語や道教の用語にも使われており、仏教でものちの密教系の鬼神で天のついているものもあるから大変ややこしい。『和漢三才図会』では「天」の部に中国風天文学の「九重天」などに続いて「仏説三十三天」の項を設け、欲界六天、色界十八天、無色界九天の名を書いている。また楞嚴經（むうぜんぎょう）によるとして「帝釈天とその四周の三十二天を合わせて三十三天」の説も紹介している。

### 三千世界（三千大千世界）

『二十五有』については大相図に説明がないが、衆生が輪廻して生まれ変われるところが欲界に十四か所、色界に七か所、無色界に四か所あり、合わせて二十五有というのだそうである。

大相図の初禅の説明には『此天敷 於一須弥世界之上』と書いてある。すなわち、須弥山を中心にした地上世界とその上の欲天を合わせて『一須弥世界（小世界）』というのであ

る。須弥世界は一つではなくたくさんある。大相図では別の世界の一部分が図の中央右隅に小さく図示され、その間は『大黒暗処』で『八寒地獄』が存在すると書いてある。

小世界が千で『小千世界』、小千世界が千で『中千世界』、中千世界が千で『大千世界』となる。色界の三禪は中千世界を、四禪は大千世界を統べる。つまり一世界の千の三乗、十億が大千世界である。ところで仏教では千の三乗も三千というから「大千世界」を『三千世界』ともいう。「三千世界のからすを殺し、ぬしと朝寝がしてみたい」などというあの三千世界である。こんな風に日常では単に世界全体という意味で使われている。「大千世界」はまた「三千大千世界」ともいう。つまり三千大千世界は十億の小世界のことで、三千の大千世界のことではない。阿弥陀経の後半に、「各々其の国に於いて広長の舌相を出し遍く三千大千世界を覆いて」と書いてあるように、通常、三千世界を一仏国としている。

## 太陽と月

大相図では妙高山の両側に『日輪』（太陽）と月が描かれ、説明がついている。太陽は『頗胝迦宝の火珠』でできた五十一由旬の天宮であり、妙高山の周囲、四洲の上方四万由旬の空をめぐる。従って四洲それぞれの日の出には半日（六時間）のずれができる。太陽の通る道は百八十あり、夏至から冬至へと一日に一路ずつ移ってゆく、と書いてあるが、これだと一年が三百六十日になってしまう。いずれにせよ、これで日照時間が変化するとい

うのである。なお、『閻浮提図付日宮図』には太陽は円盤状で上に『日宮』にちのみやが有るといい、詳しい説明があるが紹介を略する。その原典は長阿含経らしい。日宮は『日天子』の住所である。太陽は古代諸民族により神格化され、インドではスーリア神とされたが、特に重視はされていない。日天子はのち密教十二天の一つとなり、帝釈天の延臣とされている。月は『頗胝迦宝の水珠の五十由旬の天殿』であり、太陽と同じく妙高山をめぐる。十五の路があり、太陽の十二路が月の一路だという。月の速度は太陽よりはやいので月の満ち欠けができる。また月食もおこる。詳しくは「曆象編」を見よ、と書いてある。

ここまで書いてきて不思議に思ったのは「星」についての記載が全くないことである。『閻浮提付日宮図』にもなにも書いてない。ヨーロッパ中国では星座やその運行は古代から詳しく観察され、曆法や占いや宇宙論の重要な題材になってきた。この点、古代インドではどうだったのか知りたいところである。

(つづく)

◎付記 先に記したように、大相図の複製には余部がありますので、

ご入用の方はお申し付け下さい。

〒一三五 東京都江東区三好一丁目三番三号

円通寺 後 藤 真 康 宛

電話〇三(六四一)七五一八番

に　こ　に　こ　法　話

[7]

どうしてお花をこっちにむけているの



は　せ　が　わ　　たい　じゅん  
長谷川　　岱　潤

(東京・品川区戒法寺住職)

十一月に入ると、全国各地の公園や催事場で、菊の展覧会が行なわれています。

「菊ってすいぶん種類があるのねえ」

「そうだねえ、ここまで育てるには相当大変なんだろうね」

「ねえお父さん、ほとんどの菊は、真上を向いて咲いているじゃない。お花ってこれが本

当の姿よね」

「そうだろうね。天にむかって、まっすぐ伸びてる姿って、気持ちいいね」

「だったらさ、御本堂にあげるお花も真上に向いてあげた方がいいんじゃない。私前から気になっていたんだけどさ。全部こっちの私たちの方に向かってあげているじゃない。あ

れおかしいよ。まだ応接間のテーブルのお花のように、ぐるっと四方を向けてあげるのならわかるけど、あれじゃ肝心の仏さまのほうは、茎と葉っぱだけじゃない。仏さまに悪いんじゃないの」

「ミーちゃんはなかなかいいところに気がつくんだねえ。御本堂のお花確かにそうだよ。お葬式の時のお花なんかもっとはつきりしているよね。でもね、あれは間違いじゃないんだよ。御本堂や、仏さまにお花をあげるときは何時もああしておあげするんだよ」

「じゃあ、どうしてなの。おかしいじゃない仏さまにお花をおあげするのは、仏さまをきれいに飾ってあげたいからでしょう、ちがうの」

「ううん、ちがわないよ。それも確かにあると思うよ。でもね、もう一つ大事なことがあるんだ。仏さまが一番欲しいのは何かってこ

と、わかる」

「ううんと、ミーちゃんがいい子になることかなあ」

「大当たり。お花を見てミーちゃんはもうふうに思う」

「そりゃあ、きれいねえって思うわよ」

「そうでしょう。お花を見て悪い心が起こる人は一人もいないんだ。人間なら誰でも生まれた時から持っている最もきれいな心が、お花を見るとわきあがってくるんだよ。その美しい心が呼び覚まされることが、仏さまにとって一番うれしいことなんだよ」

「ふうん、だから咲いてる花をみんなこっち向けて私たちが見れるようにしているのお。

ねえ、だったら、お香もいい心と呼び覚ますための」

「今度はお香だね、お香はね。そうじゃないんだ、その逆なんだよ。ミーちゃんはお焼香

したことはあまりないだろうけど、お焼香って何回するか知ってるかい」

「手でつまんでやる回数のこと、知らない」

「あれはね、お通夜や、お葬式のときは一回なんだよ。でもね、それ以外のときは三回するのがいいと思うんだ」

「一回と三回って、理由があるの」

「お香は先ず最初に、何で焚くようになったのかと言うとね。お釈迦様がお悟りを開いた時、お説教をする時、またお亡くなりになられた時、何時もいい香りが周りに漂ったと言われているんだ。だからお通夜やお葬式というお釈迦さまのお弟子になる儀式の時はよい香りを漂わす必要があるんだ。そういうわけでお香を焚くんだから、何回もする必要はないし、お通夜やお葬式は続いてほしくないことだから一回でいいのさ」

「じゃあ、三回っていうのは何故なの」

「お香を焚くといい香りがするよね。そうするとどういう役に立つかなあ」

「そうねえ、いい香りがするから気持が良くなるし、あ、そうだ。この間お母さんがお鍋焦がしちゃって、すごい臭いがしちゃったらあわててお線香焚いてたわ」

「そんなことがあったのか。しょうがないねえ。でもそれでわかるでしょう。お香には臭いを消す、もつと言うと清めるという効能があるんだ。昔余りお風呂に入れなかったり、入る習慣が少ないところでは、香水をつけたり、お香を焚いて、身体の臭いを消したり、身を清めたりしたんだね。だからお香は身を清めるために焚くのさ」

「それで、何故三回なの」

「正式なお焼香の仕方として、お父さんが先生から習ったのは、三本の指でお香をつまんで、三回するんだそうだ。三本の指というの

は、三大煩惱、つまり三つの良くない心、ガツガツする心、イライラする心、愚かな心を象徴しているんだ。そしてそのことを考える心と、しゃべってしまふ口と、行動を起こしてしまふ身体、身口意の三つを清めるために三回焚くんたそうだ」

「ふうん、お香は自分の悪いところを清めるためなのか」

「それじゃついでだから御灯明の話もしておこうか」

「そうねえ、ついでだから聞いてあげてもいいわよ」

「こいつ、なんて言い方だ」

「だって、お父さんそこまで話さないとすつきりしないんでしょ」

「これは、やられた」

「どうぞお話してください」

「それじゃお言葉に甘えて。ミーちゃん、御

灯明はどうしてつけるのでしょうか」

「暗いからじゃない。仏さまのところって暗いから、お明りをつけて、仏さまは私たちがよく見えるようにしているんでしょ」

「ピンポーン。でもね、もう一つ明るくなるように見えるようになるものがあります。さて何でしょう」

「えー、もう一つ。わからないわ」

「それはね、仏さまから見た私たちの顔さ」

「仏さまの方から。それじゃわかるわけないわ。私たちが見られちゃってるんだ」

「私たちって、一番見えてないのが、実は自分自身なんだと思うんだ。ほら落語にもあるでしょう。自分の家の障子の穴から隣りの家を見て、あんなに障子が破れてる、早く張り直せばいいのになんて言う話」

「ああある。この前読んだ本に、ある妖精が見つけたら結婚してあげるって言って隠れて

しまうの。男の人はありとあらゆるところ探  
すんだけど、どうしてもみつからなくて、と  
うとう諦めて自分の心を見直してみるとそこ  
に隠れてたって話があったよ」

「それからインドの子供の歌に、れんなの  
があるよ。」

洗面器一杯の塩水作り

そつとあなたの顔写せ

デコチントントントン三回たたけ

あなたの目ん玉ころりと落ちる

それをきれいに洗いなさい

カチャカチャカチャと音がする

きれいに洗ったそのあとで

ひっくりかえして入れてみよう

おそらく己がよく見える

おもしろい歌でしょう」

「何か怖い歌だよ。本当に子供の歌」

「そうだって聞いたけどなあ、でもさ、こう

してあげてゆくと結構あるもんだねえ。それ  
ぐらい自分のことって自分では見えていない  
ってことだよ」

「見えないより、見たくないんじゃないかな  
あ」

「すごい、そうだと思うんだ。そこで自分の  
ことを見つめようっていうのが、仏教の出發  
だから、御灯明をつけて、自分のことを見ら  
れていることを意識して、仏さまの前で胸が  
張れる自分であるか問い直してみること、そ  
こにお灯明の意味があるとお父さんは思うん  
だ」

「へえ、そういう風に意味を込めると、毎朝  
御灯明をつけて、お花をあげて、お線香を焚  
く、そんな簡単な動作も、結構大事なことな  
んだね」

「そうだよ、今晩はすっかりミーちゃんに仏  
事の心得を話しちゃったね」

「うん、でも結構楽しかったよ。あ、そうだ。今度の日曜父親参観日なんだけど、やっぱり無理だよ」

「ごめんね、日曜は御法事があるからどうしても出られないんだ。お父さんも一度はミーちゃんの、学校での勉強している姿見てみたんだけど残念だなあ」

「しょうがないわよ。でも私幸せなんだ」

「どうして」

「みんなは自分のお父さんの働いている姿って、絶対見れないでしょう。でも私は毎週見ているんだもん」

「そうだねえ。確かにミーちゃんたちには自分の学校での姿を見られることより、父親の働いている姿見たほうが、助かるよね」

「それもそうだけど、みんなはお父さんの悪口ばかり言ってるんだよ。逆に可哀想になっちゃうよ」

「ミーちゃんはちがうの」

「ちがうわよ。今日だっていいお話し聞かしてくれだし、尊敬してるわよ。それもお父さんの働いているとこ、いつも見ているからだと思うんだ」

「それはどうも、お勤めの人たちに悪いみただね」

「お父さん。お父さんっていつも御本堂で、檀家さん相手に今日みたいな話しているんだろけれど、私たち家族にはしてくれないじゃない。時々は今みたいな話もしてね」

「そうだね、ミーちゃんにそう言ってもらわないと、お父さん気がつかなかったよ。有り難う」

横で聞いていたお母さんも、大きくうなずいていました。

## 海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(6)—

木きの  
下した  
隆りゅう  
一いち

三、四日後、私は借りていた「石川啄木歌集」と歌を書き抜いたノートを持って、有武一郎を訪ねた。

「ハチ、今日もいませんね」

と挨拶代りに言うのと、

「放浪癖がついてしまったらしい。しかし、君は余程ハチのことが気になるようだね」  
そう言って、一郎は呆れたように私を見た。いかに呆れ返られようと、ハチは私にとつて気になる犬であった。

「一度、イリコを五、六匹やっただけの仲で、頭を撫でるとか耳の後ろをくすぐるとか、

そんな正式な挨拶をしてないもんだから……」

「ふん、それが犬に対する正式な挨拶ですか。君は面白いことを言う人だね。ハチはそのうち帰ってくるさ。ところで、啄木の歌で氣に入っただのは何首ありました？」

と、一郎は話題を変えた。例によって一郎の言葉は丁寧になったりぞんざいになったりした。私が藁半紙を綴じたノートを見せると、一郎は俄かに検閲者の目になって、丁寧にノートのページを繰って行った。

一郎が全郎に目を通し終えるまでには、かなりの時間を要した。瀬戸の火鉢が唯一の暖房の部屋だったから、どこからともなく寒氣が忍び寄って来て、身にしみた。その間、私は窓越しに見える垣根の山茶花に目を当て続けていた。弱々しい初冬の日射しの中に咲く真紅の花は血の色に似て、ふと悪い予感がした。△結核患者の咯血は真っ紅で、本当にきれいな色をしている。いつどこで誰に聞いたのか忘れたが、そんな言葉が不意に聞こえてきたのである。私は慌てて頭を振り、その言葉を追い払った。

『『一握の砂』の第一章『我を愛する歌』から二十八首。『煙』から三十首。第三章の『秋風のころよさに』からは七首。『忘れがたき人人』から三十三首。第五章『手套を脱ぐ時』から三十一首……ですか。『一握の砂』五百五十一首中百二十九首、そして第二歌集『悲しき玩具』は百九十四首中四十首……かなり厳選ですね』

「なにぶんにも初めて読んだものですから。自分に分かるものの中から好きなものだけ選びました。二度三度読めば、また違った歌を選ぶかもしれませんが……」

実際、男女の機微に触れた歌はおぼろげに分かりはしたが、少年の潔癖さがこれらの歌を選ぶことを拒否した。

「それでいいのです。人が寝めるからそうなのかと、自分の想念を誤魔化して付和雷同する必要はありません」

△ソウネン▽△フワライドウ▽一郎の話の中には、時々私の知らない単語や熟語が出てくるので、その都度私は覚えておいて、後で辞書で確かめなければならなかった。

『秋風のこころよさに』から七首というのは少ないけど、どうして?」

こうなると、完全に口頭試問だった。

「なんとなく啄木らしくないな、と思いました。この章だけが浮き上がってるような感じがしたんです」

「確かに君の言う通りです。『明星』に拠った星莖派の匂いが芬々している。もっとも啄木に『明星』の主宰与謝野鉄幹に認められて『明星』から出発した人だから無理ないんだけど。特にこの歌なんぞは、その最たるものだよ」

歌集を開いて一郎が指さしたところには、

風流男は今も昔も

泡雪の

玉手さし捲く夜にし老ゆらし

の歌が載っていた。

『『泡雪の』』というのが僕には分からないんだよ。枕詞的に使っているんだろうけど。『泡雪の』が係るのは『若やる』か『消ぬ』で、『玉』には係らないからね。『明星』にはこの手の歌が多いんだよ。だが、啄木が特にこの章を立てて星莖派めいた歌を集めたのには訳があったんだ。『一握の砂』の序に、『秋風のころよさには明治四十一年秋の記念なり』と書いているが、この年『明星』が第百号を以て終刊しているんだ。『明星』に対しては、啄木には啄木なりの深い思い入れがあったんだろうね。惜別の情っていうのかな。時に啄木二十三歳、若いねえ」

これは後年私が知ったことであるが、この年は啄木にとって激動の年であった。しかしなぜか一郎はそれ以上は言及しなかった。釧路に於ける芸者小奴との交情、単身上京して以後、浅草の私娼窟に入りびたったことや借金に借金を重ねたことなど、それは、中学生に話しても無駄と判断したためか、或いは彼自身、啄木の行為を説明するだけの知識を持ち併せていなかったかのどちらかであろうが、恐らく後者ではなかったかと私は思っている。

△セイキンハ▽また一つ分からない言葉が増えた。私はこの語もしっかりと頭に刻み込んだ。

「この前言ったように、僕が『一握の砂』よりも『悲しき玩具』に心引かれるのは、これ

が推敲された上で浄書された歌稿をもとに編まれた歌集ではないということなのです。これは啄木が親友土岐哀果（善應）に託した歌稿ノートをそのまま上梓とした、言わば書き下ろしの作品なんだ。啄木にしてみれば推敲したい歌はあったかもしれないが、瀕死の彼にはもうその余力がなかった。そんな原稿を出版社に渡すのは、悪魔に魂を売る所業に等しかったかもしれないが、ひたすらに金が欲しかったんだよ彼は。同じ三行書きでも、句読点や?!—などの記号も書き加えられていて、『一握の砂』とは違った趣があつて僕は好きだ。啄木の素直な心が伝わって来るようで……。君も選んでいるが、『悲しき玩具』の中では、とりわけこの歌が僕は好きだ」

と、一郎は頬を紅く染めて口疾に喋った。そして、彼が挙げたのは次の歌だった。

新しき明日の来るを信といふ

自分の言葉に

嘘はなけれど——

有武一郎も亦、新しい明日の来るのを信じつつ病軀を養っているのであった。一郎の頬の色は喋り過ぎて上気したのではなさそうだった。体をすくめると、

「急に寒くなってきたね」

と言った。微熱が出てきたのだらう。

「少し休んだ方がよくはありませんか」

と、私が言うと、

「そうさせて貰いましょう。これに懲りずまた来て下さい。読みたい本があったら、何でも持って行っていいよ」

彼はそう言ってくれたが、結局その日は何も借らないで帰った。

石段の上から下を見ると、坂道の途中に、帰って来るハチの姿があった。ハチが歩いているのを見るのは初めてだった。よく見ると左の前脚が不自由で、左脚をつくたびに少し体が左にかしぐのを、頭を振ってバランスを取っていた。ハチは石段に脚をかけたところで上にいる私を認めたが、立ち止まりもせず、ひょこひょこと上がって来ると、石段に腰掛けていた私の横に来て、体を私にもたせかけるようにして坐った。全く警戒する風はなかった。

「ハチ、どこへ行ってた」

そう言いながら、ごく自然に頭の上に手を置くと、一度ピクッと耳を動かしたが、別に嫌がる様子は見せなかった。挨拶は終わった。

「ハチ、待ってろよ、いまイリコを持ってくるから」

相変らず愛想のない犬だった。あなたのお好きなように——そんな顔をして私を見ただけで、フンと鼻を鳴らすと横を向いた。その癖、私がどの家の住人であるかをハチの目は的確に捕えていたらしく、翌朝私が学校へ行こうとして玄関を開けると、ハチは門の格子

戸の前に坐っていた。

「おお、ハチ来てたのか、どうした」

私が言うと、ハチは立ち上がって、この時初めて尻尾を振って応えた。

「お母ちゃん、ハチが来た。何か食べる物やって！」

私が大声を出したので、母は驚いて台所の戸を開けた。そして、そこに大きな犬がいるので二度驚くこととなった。

「どにの犬?！」

「天理教の犬だよ。おとなしいから大丈夫だよ」

「何かやれと言っても……」

「味噌汁のだし取ったイリコがあるだろ」

「あんなもの食べるかしら」

「食べる、食べる！」

遅刻しそうなので、そう言い捨てる私を抱えて飛び出した。後は母がなんとかするだろう、決して犬が嫌いな方ではないから……。しかしハチが母の与えたものを食べるかな? それだけが気掛かりだったが、夕方帰って母に首尾を聞くと、味噌汁をかけた麦飯を食べ、井一杯の水を飲むと、後ろも見ずに帰って行ったとのことであった。

△特別連載②▽

法然上人と中山介石（中）

須藤隆仙

（函館市称名寺住職）

法然上人の風景

少し前に、作家司馬遼太郎さんが、『空海の風景』という小説を発表されました。空海即ち弘法大師を小説化したものですが、その題が『空海の風景』として、人間に「風景」とつけていることから、非常に注目され、あるいは斬新な着想としてもはやされ、以後、人名に「風景」と付語することがはや

り、NHKの放送までがこれをまね、あるいは小論などでもこれをまねた題が、さかんに見られたものでありました。「新島襄の風景」だとか「石川啄木の風景」だとか、いうふうにあります。

じつはこれについて、私は不思議な体験をしているのであります。あえて不思議と表現しておきますが、次のような次第であります。

昭和四十四年のことだったと思いますが、NHKテレビ教養番組(全国放送)で、北海道の五稜郭を取り上げることになり、その出演者に司馬遼太郎、加茂儀一(元小樽商大学長)、色川大吉(東京経済大学教授)の各氏が決まり、地元から私も出演者に選ばれました。一時間の番組を作ったのですが、なんとそれには九二日間を要しました。そのため私は、二日間、この偉い先生方と一緒に、朝・昼の食事から、晩の宴会まで、大変光栄なことでした。先生方といろいろなお話ができて、非常に勉強にもなりました。とくに司馬さんとは、その出世作『梟の城』が『中外日報』紙上に載ったものであることと、当時私が中外日報函館支局長の名を持っていたこととで、特別話が合い、しかもあの宗教に詳しい司馬さんですから(司馬氏は某新聞の宗教担当の記者もした)かなり深い宗教談ができたことは幸せなことでした。

そのとき私は、法然上人と中里介石のこと

で、今は亡き真野正順先生(元大正大学学長)から聞いた話を司馬さんにしたのでした。真野先生は法然上人鑽仰会の生みの親でもあられるわけですが、先生はあるとき、大正大学の学生だった私たちに次のようなことを話して話してくれたのであります。

「かつて、作家の中里介石氏に、法然上人を小説にする場合の苦勞話を聞いたことがある。それによると法然上人というお方は、私たちが考えている以上に、もっともっと偉大なお方であって、作家の人たちでも、親鸞聖人や日蓮上人ならば比較的に描き易いのだが、法然上人となると、なかなかそうはいかない。ただ法然上人そのものを小説にしようとして取り組んだのでは、とても描けるものではない。それは山でいえば偉大な偉大な富士山を描くようなものであって、富士山だけを画面におさめることは無理なものだ。手法としては、雲上の



——ありし日の中里介山——

高峰だけを描くとか、裾野の風景を描くとかで、それで富士の雄大さを示すより外ないのであって、法然上人を描くのもこの手法以外に手がない。周辺を描いて、そこに法然上人の偉大さを示していく、それほど上人は偉大であり、小説家の手にあまるのである、と、こういう話であった。法然上人とは、それほどに偉大なるお方なのである”

この真野先生のお話を大変な感動をもって拝聴した私は、この話を司馬さんにしたのでありました。

すると司馬さんは、この話に大変興味を示され、「なるほど、法然上人の風景ね、法然上人の風景ね」といって、うなずかれたのでした。

さてそれから何年かして、司馬遼太郎さんが『空海の風景』と題する弘法大師の小説を発表したことを、新聞で知ったのでした。私

はハッとしました。以前話した法然上人を描く中里介山の「風景」の話、感心して聞いていた司馬さんは、早速これを取り入れて、その方法で弘法大師の小説を書いたものであると、そのことが解ったわけがあります。司馬さんは、「いやいや、そんなものではない。あれはおれの頭の中で作った、あくまでもおれ一人の発想だ」といわれるかも知れませんが、どうも私にとっては、函館で話したあの時の話が忘れられないのであります。

一時、さかんに使われた「○○の風景」という語、そのきっかけとなった司馬さんの小説『空海の風景』、それらはじつは中里介山による「法然上人の風景」の発想が震源点であったと見て、間違いないと思います。

ところで、前にも記しましたが、介山が某人（じつは介山の伝記の著者笹本寅氏）に、「法然上人などという大人物になると、とてもそのままだけに書けない。ぐるりから攻めて行つて、その上にぼおっと浮かす。つまり点描の

ような形をとらなければ、書けるものではない  
りません」と語ったという話は、右の真野先  
生のお話と符合するわけでありまして、じつ  
は介山の作品というのは、そのような手法が  
基本であったようにも思えるのです。それは  
介山が、『大菩薩峠』二十「禹門三級の巻」

の「あとがき」(大正十一年六月)に、次のよ  
うにいつているからであります。「昔、或る  
画工が大地へ数百畳の紙を展べ、大樽に墨汁  
を充たし、俵を解いて筆に換え、紙上を縦横  
に走って何かを描いて居りました。傍人は其  
の何を描いているのかを知ることが出来ませ  
んでした。やがて画工は衆をさし兼ねいて高  
き樓上にのぼらせて見ると、其れは巨大なる  
仏像を描いていたのだということがわかった  
そうです。」

このようにして見てくると、介山の作品の  
根底にあるものは、じつは法然上人の人格で  
あられた。法然上人の偉大さを仏教の帰結と  
し、その仏教の世界を小説の形で示していく

というのが、彼の一貫した態度だったので  
ないかと思われるのであります。

そういたしますと、橋本先生が、仏教作家  
としての介山の窮極を、法然上人の浄土教で  
あった、と喝破された意味もよく解ってくる  
のであります。

## 介山の生涯

ここで、中里介山という人の一生を少し見  
てみたいと思います。これには主に全集の年  
譜、柞木田龍善『中里介山伝』、尾崎秀樹  
『中里介山―孤高の思索者』などのお世話に  
なります。

介山は明治十八年(一八八五) 神奈川県(後  
東京都) 西多摩郡羽村六四〇に、父中里弥十  
郎・母ハナの次男として生まれました。兄姉  
・弟妹など八人兄弟の家です。本名は弥之助  
です。これは父が三菱の創始者一人岩崎弥之  
助にあやかるようにと命名したものだそうで  
す。父業は多摩川畔にある水車小屋での精米

業でした。だが介山八歳(数え年)のとき精米業は不振になり、一家はハナの父を頼って横須賀に移住しました。

だがそこでの商売もうまくなく、介山十歳のとき再び郷里羽村に帰り綿屋を開業しております。介山はこの頃から『少国民』『少年園』などの雑誌のほか、『平家物語』なども愛読したというのですから、やがて大成する文学者中里介山の姿が、もうすでにうかがえるわけです。十三歳、西多摩小学校高等科三年を修了のとき成績優秀の賞状をもらっております。この年十一月、『少国民』に「さても憂たこの世の中や」という一文を投稿しております。無常感が表われているものでした。翌年頃からは月寒と号して『万朝報』に新体詩を投稿し、しばしば賞を受けております。またこの年(明治三十一年、十四歳)は、東京湯島天神町の義従兄の家に寄宿し、電話交換局の交換見習として働いております。翌年(十五歳)正式な電話交換手となります。

だが、この年、父が病気で吐血し、実家は財政困難を訴え、介山は義従兄に借金を申し込んでおります。またこの頃、我国で初めて社会教育を主張した杉村介石に私淑し、号を「介山」としたのも、その影郷だろうといわれております。

十六歳(明治三十三年)電話交換手を止め、郷里に帰り母校の代用教員となり、翌年準教員の免許を取りました。さらにその翌年(十八歳)には尋常小学校本科正教員検定を受け、一度に修身・国語・日本歴史・地理・算術・理科の六科目に合格、人々を驚かせたというのですから、生来の頭の良さもあったでしょうが、やはり大変な努力家だったと思われるのであります。そしてこの頃また、とくにキリスト教に興味をもつようになったとい、それはこの前年、同僚教員でクリスチャンの女性を知ったのに起因しているようです。

十九歳の年、上京して北豊島郡岩淵小学校

の代用教員となり、その十二月には『平民新聞』に応募した小説『何の罪』が佳作となりました。

その後、学校が換わり、同人雑誌の発刊に関係したりしますが、二十二歳（明治三十九年）のとき隆文館から処女出版『今人古人』を出し、都新聞主筆田川大吉郎の推挙で都新聞社に入るわけです。

そして二十五歳、初めて新聞小説『氷の花』を都新聞に連載するわけです。それから二年後、やはり都新聞に法然上人の小説『室の遊女』が連載されるわけがあります。この間にも多くの作品を発表し、その後は順風満帆という状態で、かの有名な『大菩薩峠』が都新聞に連載し始められたのは、大正二年（二十九歳）九月であります。

大正八年三十五歳の十一月、十三年間勤めた都新聞を退くわけですが、以後は有名作家として勢力的に活動をし、昭和十九年数え六十歳で亡くなりました。

こういつてしまえば簡単のようですが、勿論、人間である以上、みなそれなりに苦悩があります。介山も若い時は、父が異常者で困ったようでした。柞木田『介山伝』に次のようにあります。

「母は父と結婚以来、仲人の処へかけこんだことは、何十回あったか数知れないほど。卒倒以来父の暴君はいよいよ激しく、母は娘時代から、比丘尼に憧れていたため、川越方面の尼寺に身を隠してしまう状態であった。父弥十郎の神経が異常な病的まで昂進し、酒をあおり、怒り暴れ狂う有様が度重なった結果、父が家族を追いつたか、家族が父を置き去りにしたのか、判らない形式で、一家は離散、という最悪状態になった。明治三十六年、介山十九歳のころである。……変態的に、妻子を虐げた父だったが、実母センも前年（明治四十二年）死去し、一人淋しく、羽村の郷里で、

売り喰い同様な生活をつづけていたが、病の悪化するにつれて、東京の妻子が恋しくなり、蒲団を背負って、死の数ヶ月前、羽村の土蔵から、家族のいる東京谷中真島町の家にきて、前非を悔ひ、文字通り「父帰る」という場面となって、家人の手篤い看護を受けて、明治四十三年七月七日、五十四歳で死んだ。」

介山はまた生涯独身で通した。これについて尾崎『介山』は、次のようにいっておりま

す。

「介山は一生独身をとoshた。二十七歳の時には独身会を組織した。彼は世間一般の人が妻子のために払う労力を、できることならば世の中のためにふり向けたいという考えを持っていた。それをいわば天命とも考えていたようだ。しかし女嫌いではなく、交渉を持った女性の数も少なくない。

それというのも家庭の悲惨さを幼少期からつぶさに味わってきており、惜しみなく奪いあい、また与えあう愛の寂寞を知っていたからだともいえる。彼の女性にたいするかかりかたは、『大菩薩峠』に登場する幾人かの女性像に影をとどめているようだが、彼をめぐる女性模様は、その人間を知るうえで欠かすことのできない部分でもある。」

また、『大菩薩峠』の作家として大御所的存在にありながら、挿絵画家と問題を起こし。訴訟事件にまで発展したこともありま

す。昭和十一年(五十二歳)には、衆議員議員に立候補して落選しております。

しかし介山という人は、まじめ過ぎるほどまじめな人だったようで、そのために起きたトラブルもあったようですが、まあ自身としては潔く生きてやうで、尾崎秀樹のいう、いわゆる「孤高の人」というのが、びったり

でありましょう。

## 仏教思想家として

中里介石は偉大なる仏教思想家であった、ということがいえると思うのです。私としては、むしろ、仏教学者であったと、いいたいところですが、それはひいきし過ぎであるところのご意見が出るかも知れませんので、「仏教思想家」としておきましょう。

介石の仏教作品には、これまで述べた法然上人に関するものの他に、『文覚』（大正元年『都新聞』）、聖徳太子を扱った『夢殿』（大正十年『日本及日本人』）、日蓮上人を扱った『清澄に帰れる日蓮』（大正十年『日本及日本人』）などがよく知られております。『文覚』は大正元年十一月から翌二年三月までの連載ですが、この年すでに聖徳太子の研究に手を染め、年譜に「五月（大正元年）明治四十五」『大日本仏教全書』を読み、聖徳太子の研究を決定した」とあります。

『夢殿』については、『創作「夢殿」について』という一文を草しておりますが、それには、「伝教も偉大であり、空海も偉大であり、恵心も、法然も親鸞も日蓮も、その姿に於て優に世界人類のスノーラインを抜く処の高峰峻嶺ではあるが、聖徳太子に至るとそれ等の肩を打ち越えて、そこに仏と菩薩との位が明かに現実的に現われているかのごとく見ゆる。思想界のアルプスの壮観偉観は、これまた相当その峻山難路に足に覚えのあるものでなければ味いきれないかも知れない。斯くの如く私共の聖徳太子礼讃は、最初よりその偉大に渴仰して而して参入し得たのではなく、臆げな道をたどって、至りつくしてはじめて俄然としてその大観が開かれたのである」と記しております。

これを読みますと介石は、法然上人よりも聖徳太子に興味を引かれたようにも見えますが、しかし、後述するように、後に法然上人の評価は、聖徳太子を越えていきます。

また、注目すべきは、日蓮聖人伝でありまして、『清澄に帰れる日蓮』も大変な力作であります。何とその中に、相当なスペースを使って、法然上人礼讃が出てくるのであります。それは次のようにして法然上人のことが挿入されてくるのであります。

若き日の日蓮（蓮長といつた）上人が、遠州浜松在へ行ったとき、一人の老婆が法然上人の話をして念仏を唱えながら立ち去る、それを眺めた蓮長の歎息から話が法然上人へと移るのであります。以下に転記します。

「彼は念仏を悪む人である。

念仏を悪むと共に黒谷の法然なる者の絶大なる力を認めないわけには行かない人である。只今、彼の眼中には法然という一つの人物だけしか無いと云ってもよいほどである。

彼は当時の有ゆる道俗がする如く、法然に帰命頂礼してその偉大なる人格を仰ぐの

ではない。法然を悪んで而してその魔力の大なるに齒嚙みをし、実は彼何者ぞという抱負を燃え上がらせている。信ずる者にと取っても偉大なるは法然である。悪むものにと取っても大いなるは法然である。前にも云う通り、この青年僧は渺たる東海の一隅なる安房の国が天昭太神の因縁あるが故に日本国の中心であると思ひ、またその安房国に我生れてこの日本国の柱となることを確信しているほどの豪邁の男である。釈尊を別にしては古往今来の大師にも聖賢にも一歩も譲るまじきほどの気魄を抱いている青年僧であつた。この破産に近いほどの厖大性を抱いている青年僧の眼中にたった一人の人物が隠れている。それが即ち黒谷の法然であることは偽ろうとしても偽れない。

蓮長―後の日蓮は、法然の反動児と云つても宜しい。日蓮無くとも法然はあつたが法然なくば日蓮無しと云つても宜い位に、

彼に取っては向うさす敵であつた。」

こうして次に「日本に於ける浄土門の開祖、黒谷の法然の事は、後の日蓮を知らんとする者には必ず知らねばならぬ知識である」として、「法然は美作国久米の南条稻岡の庄に生れた……」と法然上人の伝記紹介に移るのであります。

そしてとくに、大原問答のことについて、法然上人をほめちぎっているのであります。「大原問答の如きは幾度聞いても血が湧く」といつております。大原問答というのは、すでに周知のとおり、法然上人が他宗の学僧と信仰上の問答をして、他宗の学僧たちを信服させた有名な事件であります。史上によく知られており、例えば『広辞苑』に、「浄土宗の開祖法然が文治二年（一一八六）叡山の顕真の請に応じ、大原の勝林院で、叡山・南都の学僧と浄土念仏の教理を論議・問答して信服させたこと。大原談議。」として載つており

ますし、歴史辞典などにも、「天台宗の僧顕真が京都大原勝林院に法然を招いて行なつた浄土教についての問答。法然は弥陀の本願こそ末世の凡夫を救う唯一のものであることを説き、聴衆が信伏したという」といつたふうに紹介されております（角川『日本史辞典』）。

介山はかなりのスペースでこの事件を詳記しており、「重ねて法問を試むること名人の射る矢のようであつたが、法然は縦横にそれを説破し、釈義して窮することが無い」といつているのであります。そして次のように続きます。

「大原問答はかくの如きの盛観であつて一代の人目をそばだてたのみならず、今に至つても尚お儒夫を起たしむものがある。併しながらこの青年僧（日蓮のこと）はそれを面憎いことに思う、彼何者ぞやと思う。」

それよりも憎いのは、彼れ法然房が手にせる天下無二の利剣である。僅かに六字に

約めた名経の利剣が、三世十方の有ゆる物象を斬りつくして行く太刀風が羨しいとも憎いとも思わないわけには行かぬ。この青年も希くはそれに似る一剣が欲しい。」

かくして日蓮上人の「南無妙法蓮華経」の題目が考察されてくる、と、こういう展開になっていくわけであります。

じつはこの論は、中里介山が仏教を見る上での一貫した眼なのであります。しかも前に記しましたように、後にこの論調を完全な学論として樹立し、打ち出した、博士さんがいるのであります。

ですから介山のこのような見方は、彼一人の思いつきではなく、そこに普遍的なものが満蔵されていたのであって、介山はそれを最初に喝破した人であります。まさに偉大なる仏教思想家でありました。

(つづく)

(好)  
(評)

## 『仏事と信仰生活・浄土宗』

宮林雄彦編

四六判 一四四ページ

定価八〇〇円(二二〇〇円)

◎浄土宗の檀信徒には必携の書!!  
平明な記述と豊富なイラストによるあかるい装丁の本!!

△発行▽

図書出版群書

〒170 東京都豊島区巣鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七―八四一一

(振替) 東京七一六八七五九

## ◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由 (生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま  
とめ下さい。)

一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度

一、締切 毎月五日

法 然 上 人 鑽 仰 会

### 「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄 土 五十四巻 十一月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十三年 十月二十五日 印刷

昭和六十三年十一月 一日 発行

編集人 宮 林 昭 彦

発行人 佐 藤 密 雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二二 振替東京八一八二一八七番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

# 『江戸物語』

細田隆善／豊明／著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

● 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録／定価一八〇〇円

【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

江戸は全国総城下町

江戸は世界一の人口

江戸は日本の縮図

江戸で日本の富の半ばが消費

江戸文化の出現

△発行・発売▽

ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一

電話(〇三)二六九―一二九三 二六七―六六三七

振替(東京)七一〇九三／〒一六二一

第五十四巻

十一月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
昭和六十二年十月二十五日印刷 昭和六十二年十一月一日発行